

# やまと 民俗への招待

鹿谷 動

若草山全山が、赤い炎で嘗め尽くされたように輝いている。冬空に巨大な菊花のような花火がいくつも広がり、興福寺五重塔などが美しいシルエットを見せる。古都に早春を告げる行事としてこしらした写真が、1月下旬の新聞紙上を彩る。長時間露光や合成によってカメラが発見した新しい光景だ。

山焼きが湧き上がる。しばらく続いた花火が終わり、再び静寂さを取り戻すと、山焼きが始まる。若草山の一重目の籠を取り巻くように松明の炎が散らばり、点火後たちまち、火勢はS字状に二重目へ這い上がっていく。燃え盛る炎が寄り集まり、渦を巻いて大きな火柱が空へ登ると、離れた場所でもバチバチと茅が燃える音が聞こえる。大勢の人々が固睡をのんで、この光景を見つめている。

火勢が衰え始めると、観客は急に散り始め、7時過ぎには、もう周囲に人はいなくなった。まだ煙が立ち上り、山全体が熾火に包まれたように輝いている。



若草山の山焼き＝勺禪子さん撮影

## 若草山 山焼きの民俗

950)から1月15日の成人の日の行事となつた。新たな実施に際して、当時観光課事業係長の大東延和氏が、春日大社の神火を火種にして東大寺と興福寺の僧兵が点火するという方式を考案した。模型飛行機大会や仕掛け花火大会など成人式のさまざまな催しも企画して、行事の定着が図られた。宗教的な装いを交えながら集客力のある観光事業として、戦後の山焼き行事が続けられた。

である。その根拠は不明だが、こうした広報のためか、山焼きは同古墳の「惡靈」を鎮める供養だといふ人さえ出でてきた。古墳の被葬者の靈魂を鎮める必要があるのであれば、各地で古墳を焼かねばならなくなる。

若草山は元は葛尾山と呼ばれていた。鎌倉時代の建長7年(1255)2月の山焼きの日に、東大寺公人(警吏)と興福寺公人の間で刃傷沙汰があつたのが、若草山の山焼きの初見とされている。時に「黒葛尾山」とも記されるが、これは山焼き後の姿だろう。山焼きの起源は諸説あるが、野本寛一氏がかつて指摘したように、良質の草や蕨を得るために、全般的に行わってきた農民

表

草や蕨を得るために、全国的に行われてきた農民の山焼き・野焼きの民俗が淵源と思われる。